

例会 作品 帳

◎平成二十六年十一月十五日(第二十一回)

(佐藤 亮照)

差し入れし我が手に揃う晩秋や小川の冷たさ井戸の温もり  
同年の友を重ねて送りたるいつの間<sup>ひま</sup>にやら我が身年降る  
本堂の寒さ静けさ厳かさもみじ茶会の賑わい何処

(黒沼 貞志)

診察の待合室に翁居て天眼鏡で新聞見入る  
かなかなの途切れし声にかなかなと遠くに聴こゆかなかなの声  
この地にも都会の姿忍び寄りチラシに目立つ小さきお家

夏の夜の花火大会懐かしき時も流れて棧敷席有り

世の中に名もなき草は無いと云う路肩<sup>はぶこ</sup>に蔓延るあまた草あり

朝まだき日課となりし窓開くる明けの空にはスーパームーン

秋歩み橙色の花一輪主が去りし家の庭先

十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりしマイライフワーク

銀意草露けし枯葉押し分けて旅人癒す山の辺の道

ブナの木の本漏れ日の中佇めば山の秋風顔を撫でて行く

大岩と雪との間に<sup>はくせい</sup>裁星霜まるで蛸足強き枝木は

錦鯉古刹の池に棲みついて水藻の陰で尾びれ隠さず

若者が群れる松島瑞巖寺雑誌翳してGLAYと伴に

(千葉 克明)

エンディング準備している友ありて急な入院今悔やまれる

下血をば吐血と聞いた友もあり生死にかかわる噂となりぬ

高層の窓から見える街の顔時と共に変わりゆくかな

御嶽の噴火に散った人は皆働き盛り国の損失

朝日浴び畑に通う上り道生きる喜び満ちて来るなり

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

朝日浴び畑に通う道すがら太陽拝むインカを想ふ

(寺崎 秀也)

秋の空一期一会のおもてなしもみじ彩る茶の湯の会

おごそかに和讃・詠歌にオカリナと音色奏でる霜月の寺